

追悼

故・永富博道さんを偲んで

湯浅謙

永富さんはとうとう逝ってしまつた。私と同年の八六歳である。

脳卒中の後遺症で長く老人病院や老人ホームで静養しておられたが、本年八月初め東京杉並区の沓掛老人ホームで誤飲による肺炎を発病し、同区内の病院に入院されていた。しかし誤飲による嚥下障碍を繰り返して胃瘻造成の手術を受けたが次第に衰弱し、一月四日、急性心不全に陥り死亡されたとのことである。

惜しい人を失くした。回復して戦争体験の証言をされれば平和のために有益だったろうと悔やまれる。永富博道さんほど天皇制軍国主義のもと皇国史観に熱狂し、「正義」と信じて中国人民に罪人を犯し、かつ徹底的に転変して平和の戦士として活躍した人は数少ないでしょう。

私は永富博道さんと同じく中国の山西省で敗戦を迎え、国共対立下で軍の謀略により国民党軍に徴用される破目に陥った。そして人民解放軍に敵対し三年半の抗戦ののち捕虜——戦犯として一四〇名と共に太原監獄、戦犯管理所に拘留された身である。

永富さんの日軍時代に犯した罪行は筆舌に尽くし難く、

があつたが、彼は当初は「戦争ではこんなこと当たり前だから平気で喋つた。得意気だった」と言われた。そんな意識だった。

しかし悔悟反省の過程で私たちはほとんどこれらの罪を認めることにより人間性を取り戻すことができたのです。私たちは一九六一年六月、中国の寛大政策を受けて不起訴となり帰国できたが、永富さんたち九名は起訴されて撫順監獄に移され刑を執行された。

私たちは帰国直前に集會を開いたが、そのとき永富さんが発言し、「私は所長の王振東先生の最愛の部下を殺したが、先生はそれを一言も私にとがめられなかった」と大声で告白し落涙した。その真剣な態度が目に焼きついている。永富さんは一九六三年九月釈放され帰国した。私は永富さんに会ってすぐに平和の集會に案内した。そのとき、「僕は明日からでもアカハタを街頭宣伝する」と言っていた。もちろん私は情勢を見てからにしろと制したが、永富さんは、正しいと考えたら身を挺して行う人物だった。

永富さんは全国をまわって自分の罪行を証言し、軍国主義の恐ろしさ、悪辣残酷さを全身で訴え聴衆を感銘させた。おそらく右翼が抗議に來ても一歩もたじろがなかったであろう。

一九九七年、山西省へ平和友好の旅を組織し、太原解放記念公園を訪れたとき、永富さんは謝罪文を碑に捧げたあと突然吐血し始めた。恐らく感極まって神経性の胃痙攣を

村人から「閻魔王」と呼ばれたそうである。私自身も人道に許せない数々の戦争犯罪を犯した身でありながら、ともに自分の犯行などまったく脳裡になく、敗戦後も山西に残留して戦争を続けたことは恐ろしい軍国主義の為せる業である。しかも日本再建の美名に馳せられて再び中国人民に罪を犯してしまつたのだ。

残留部隊は二七〇〇名程だったが、約一〇〇〇名は三回に分かれて帰国し、七〇〇名が戦死、最後まで残つた八〇〇名程は河北省永年の捕虜收容所に收容され、ここで罪行の反省、政治学習、労働等を行った。そして驚くべきことは、ほぼ全員が戦争犯罪を犯しており、かつ全く私と同じくそれを自覚していなかったことである。

私たちはここでの二年半の生活の中で中国の寛大な処置の下、ほとんどが初歩的に自分の罪行を想起・認識し、自分が天皇制統治のもと欺瞞宣伝と強制により、また一部は利益誘導にのせられ、中国に渡り戦争犯罪を犯した事実が気が付いたのである。

しかし、反省覚醒の過程は決して容易ではなかった。特に捕虜生活二年を終えて、私たち犯罪の重い者一四〇名は太原の戦犯管理所に移送され、専ら禁固状態で罪の告白を行ったが辛いことだった。処罰を恐れて軽い犯罪でごまかす。あいまいなまま告白する。忘れているのを必死に思い出す。残虐行為に胸が苦しい。内心闘争と云われたが、これは自分との闘いであつた。あとで永富さんに聞いたこと

激発して出血したのだろう。激情の人だった。娘さん二人と同行し初めて自分の罪を打ち明けたとのことだった。

永富さんの葬儀は夫人は病院入院中で娘さん三人だけで行い、簡素だった。

「父は最後は幸せでした」と娘さんが語られたが、恐らく永富さんの意思——大罪を犯した身だ——の意を体してのことでしょう。

永富さんの靈に願います。私たちの平和の運動を見守ってくださいように。

追、永富さんを偲んで、著『白狼の爪痕』（新風書房）
やビデオ「侵略の証言」を見てください。感銘を受けるだけでなく時代に取り組んだ彼の姿から難しい時代を理解することができます。

（ゆあさけん 元中帰連会員）

永富さん、安らかに

近藤雄生

私は永富さんについてほとんど何も知らないといつてもいいかもしれません。少なくとも永富さんにとって私は一介の若者以上のものではないはずですが、そんな自分がここに永富さんの追悼文を書かせていただいていたにいいものだろうか、正直多少とまどいを覚えながらも、その機会

をいただいたことを感謝しています。

私が永富さんのことを知ったのはほんの最近のことであり、お会いしたのも先の八月のある真夏日のたった数時間あまりでしかありません。永富さんの八六年に及ぶ人生の中に自分が多少なりとも直接的な関係を持つことが出来たのは、ドキュメンタリー映像を作るための取材でお会いした、そのほんのわずかな時間だけでした。しかしそれは、私にとってどれだけ長い時間に匹敵するか分からないほど貴重な出会いだったということを今、切に感じています。

そのころ私はもう一人の同年代の者とともに、生体解剖に関わった元軍医である湯浅謙さんの現在の活動を取材しており、そのときに湯浅さんから永富さんを紹介いただきました。永富さんが近くの老人ホームにいらつしやると聞いて、是非お会いしたいとお願いしました。「閻魔大王」と呼ばれていたほどの永富さんが今何を思いながら生活されているのか、私は聞いてみたいと思つたのです。

突然の訪問にもかかわらず快く私たちを迎え入れてくださった永富さんの、私たちへの最初の言葉は、「申し訳ありません、申し訳ありませんでした……」というものでした。背中を丸め、前かがみになりながら、しっかりと手を合わせて祈るようにそうおつしやる姿の前に、私はなんと対応していいものか分からず、ただ沈黙しつづけていたことを覚えていきます。

ただじっと聞いていることしかできない私たち若者に対

多くの人の命を自ら絶たせてしまった永富さんが、眼を潤ませながらおつしやつたその言葉からは、他のどんな人にも表しえない重みと感慨が滲み出ていました。そのときの永富さんの涙は、奥様へと同じくらいに今生きている自分自身に、そして何よりも、彼が命を絶たせることになつてしまった多くの人たちへ注がれていたような気がします。その涙は、いつしか取材を続ける私たちのもとへとつたつてきました。

そしてその日から一ヶ月半ほどして、ドキュメンタリー映像は完成しました。

永富さんが亡くなられたのはその映像のテープを氏のおられた老人ホームに送ってから三週間ほどしてからのことです。テープが着いた頃にはすでに他の病院に入院されていたということを知らず、「永富さんはあれを見てどう思ったかな……」などとのどかに考えていた自分にとって、彼の死はあまりに突然のことでした。

死の報告を受けたとき、永富さんのおつしやっていたあの言葉が頭をよぎりました。体が不自由になつてはいるけど、特に病氣もなく今を過ごしていることについて、

「私は死なせてもらえないのです。自分の罪をすべてこの世でぬぐいつくせるまで私は死ぬことができないみたいなのです……まだすべきことがたくさんある。そのためにこうして生かされているのではないかと思うんです……」

永富さんは「すべきこと」を終えることができたのだら

して丁寧な言葉で接してくださるその姿からは、この人がそれほど残酷な行為を繰り返したなどということがどうしてもイメージできません。しかし、そのギャップこそが現実だったのだと思います。永富さんの人生が半世紀以上前の話だけで説明されるものでは決まてないという当然のことが、本人を目の前にして再確認できたような気がしたのでした。特異な経験を経てきた人の人生は、その特異さだけで語られがちになりますが、もちろん実際にはその何倍もの、他の人と変わらぬ静かな日々が続いています。数々の残酷な行為と戦犯管理所での生活を経た後に、永富さんには四〇年ほどの時間がありました。私の会った永富さんはその全ての時間を内に抱えていたのです。それは、過去を見つめ、そして今自分が生きていることの意味を深く考える一人の老人の姿でした。

意識がない状態で同じ老人ホームに暮らしていらつしやる奥様のことに話が及んだときに、永富さんのただならぬ思いはもつとも強く伝わってきました。

「生かされているというだけで……、ほんとうに幸せです……」
家内は「眼も見えない、口もきけない……、死んでるとおんなじ」です。しかし、生きている。その生きているという事実がいかに大きなことなのか……。「死んだらもうさわることもできない……」生きているからこそ、「毎日、いつて、さわつて、手を握つて」やることができるんです……。「生きているということだけでも、ほんとうに幸せです……」

うか……。それはしかし、私には分かるはずありません。ただ、ちょうど偶然にも私たちがこの時期に映像を撮ることになったことが、もしかしたら死を迎える前の永富さんにとつての「すべきこと」に何らかの関係があつたのか……そんな気がしないでもありません。私たちが作つたものが、少しでも永富さんが安らかに眠れる材料になればと願うばかりです。

(こんどう ゆうき)



証言をする永富博道さん（近藤撮影のビデオより）